

2022年4月17日（日）「命のパン」

ヨハネ 6:34-40

34 そこで、彼らが、「主よ、そのパンをいつも私たちにください」と言うと、35 イエスは言われた。「私が命のパンである。私のもとに来る者は決して飢えることがなく、私を信じる者は決して渴くことがない。36 しかし、前にも言ったように、あなたがたは私を見ているのに、信じない。37 父が私にお与えになる人は皆、私のもとに来る。私のもとに来る人を、私は決して追いつかない。38 私が天から降って来たのは、自分の意志を行うためではなく、私をお遣わしになった方の御心を行うためである。39 私をお遣わしになった方の御心とは、私に与えてくださった人を、私が一人も失うことなく、終わりの日に復活させることである。40 私の父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、私がお遣わしになった方の御心は、私に与えてくださった人を、私が一人も失うことなく、終わりの日に復活させることだからである。」

【序論】

イースターおめでとうございます。今年も主イエスの復活の記念日がやってまいりました。復活があるということは、それに先立ってキリストの受難があったということ。受難節、受難週、受難日がなければ、復活はないのですから、その期間をどう過ごしてきたかはイースターの喜びの深さをどれほど味わえるかに違いをもたらすでしょう。

私の人生においてそういう時期なのかもしれませんが、ここ何年かの間に、私が幼少の頃にお世話になった方々が次々と天に召されていく淋しい現実に向き合っています。それだけに、復活の希望を語ることは自分自身のためでもあると痛感しています。大切な人との別れは、その人の存在が自分の人生にとって如何に重要であったのかに気づかされる時でもあります。私が自覚的／無自覚的に心の柱にしていた方を失ったとき、その一本が取り去られるような痛みを覚えるのです。自分の人格の一部であったと言ってもよいかもしれません。心の支えの一つが取り去られるとき、何とも言えない不安と喪失感、そして重圧が襲ってきます。この重圧が何であるのかをずっと考えてきて、最近ようやく言語化できるようになってきました。これまでの時代を私の代わりに、また私と一緒に担ってくださっていた、まさに「支え」であった存在であり、これからはその人の分を遺された者たちが負っていかなくてはならない時が来ている。多くの方が同様の経験をしてこられているのではないのでしょうか。そして、いずれは自分が誰かを地上に遺して逝かなくてはならない日がやって来る。そのような、命に限りある人間が形成している世界に向けて主イエスが語っておられる希望に耳を傾けたいと思います。

【本論】

本論1. 人々が求めたもの（物質的なパン）

今日はヨハネ福音書の「いのちのパン」にまつわる記事から、キリスト者に約束されている復活を考えてまいりましょう。先週はヨハネ6章冒頭の記事を扱いましたが、主イエスが山で五千人の群衆をパンで養われたという出来事が出てきました。^{もつと}尤も「五千人」と言いましてもこれは成人男性だけの人数であり、女性や子どもを入れれば一万人以上いたと思われます。弟子たちでさえ食べ物を持ち合わせていない状況でしたが、そこにいた少年が持っていた五つのパンと二匹の魚を増やし、このおびたしい群衆が満腹するまで与えたというのです。この奇跡を見て、群衆はイエスこそ来たるべきメシアではないかと考え、イスラエルの王に祭り上げようとなりました。しかし、主イエスの思いと群衆の思いとの間には大きな乖離がありました。今日の箇所に至るまでの、群衆と主イエスとのやりとりを見ておきましょう。

イエスは答えて言われた。「よくよく言っておく。あなたがたが私を捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ。朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもとどまって、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。父なる神が、人の子を認証されたからである。」そこで彼らが、「神の業を行うためには、何をしたらよいでしょうか」と言うと、イエスは答えて言われた。「神がお遣わしになった者を信じること、それが神の業である。」彼らは言った。「それでは、私たちが見てあなたを信じるができるように、どんなしるしを行ってくださいますか。どのようなことをしていただけますか。私たちの先祖は、荒れ野でマナを食べました。『天からのパンを彼らに与えて食べさせた』と書いてあるとおりです。」すると、イエスは言われた。「よくよく言っておく。モーセが天からのパンをあなたがたに与えたのではない。私の父が天からのまことのパンをお与えになる。神のパンは、天から降って来て、世に命を与えるものである。」(6:26-33)

群衆は、自分たちがイエスを信じるができるように「しるし」を見せてくれと言ってきます。しかし、主イエスの中では「しるし」は既に与えていた。おびたしい群衆をパンで養ったではないか。それを見ても、私が神の子だと信じないと言うのか。「荒れ野のマナ」「天からのパン」とは、出エジプトのとき、荒野で40年間主が民を養われた食物のことです。おそらく、ここで主イエスと一緒にいる群衆は、日々食べるものにも窮していたのでしょう。「この世で食べるものに困らなくなるための保証を見せてくれ」と言っているのです。しかし、主イエスの思いは異なる次元にあった。私はもつと

重要なものをあなたがたに与えようとしている。それは、神との生きた関係である。あなたがたの魂を満たすもの、「心の食物」を与えようとしているのだ。

このやりとりを見ていて、私たちも自分が第一に求めているものが何であるかが心に問われてまいります。この世で生きていくためには確かにお金が必要であり、そのところにばかり意識が向きやすいものです。群衆が心配しているのはあくまでも「肉体を維持するためのパン」「この世で生きていくためのパン」であり、永遠の問題が欠落しています。彼らは旧約的価値観の連続上でしか物事を考えていないのです。旧約聖書では、死後の命についての言及はほとんどなく、あったとしても曖昧で、人は死んだら陰府¹に下ると考えられていました。ですから、この世でどう生きるかが彼らにとって何よりも重要なことだったのです。

コロナの次はインフレと食糧危機がやってくるかもしれない、そんなことも予測されています。国民の賃金は下がり続けているのに、税金は跳ね上がり、更に物価が高騰するという最悪のシナリオです。私たちは確かにそのような危機に備えて生きていかなくてはなりませんが、置き去りにしてはならないのは「魂の問題」です。主イエスが人々の目を向けさせようとしているのは常にそこであり、今日の箇所です語られていることの本質であります。

本論 2. 主イエスが与えようとしているもの（霊的ないのち＝神との生きた関係）

そこで、彼らが、「主よ、そのパンをいつも私たちにください」と言うと、イエスは言われた。「私が命のパンである。私のもとに来る者は決して飢えることがなく、私を信じる者は決して渇くことがない。」(6:34-35)

主イエスのご自分を「命のパン」と表現されました。このことばは「人に命を与えるパン」と解釈することもできますが、主イエスご自身が「命の根源」であると言っておられるとも取れます。私たちにとって「食べる」という行為は生きることそのものとも言えるでしょう。日々の生活の中で常に考えていることであり、生きることを「食っていく」と言い換えることもあります。食べなければ生きていくことができないからです。ここで言われている「パン」とは「命」の象徴であり、それなくしては生物が存続し得ないものです。私たちの意識は兎角物質的な「パン」に向きやすい。しかし、主イエスはもっと大事なものがあると言っておられるのです。それは、あなたがたの魂の問題、永遠に関わる問題だと。私たちが霊的に生きたものであるかがここで問われてい

¹ 陰府は死者の世界。全く静かで、誰がいるかも分からず、何も感じない場所とされる。(聖書協会共同訳注解)

るのです。神との生きた関係を持っているか。もし神の御前に生きていないのであれば、私たちの魂は枯渇しているのだと。ですから、35節で主が言っておられる「**私のもとに来る者は決して飢えることがなく、私を信じる者は決して渴くことがない**」ということばは、主イエスを信じる者の魂は永遠に満たされ続けるということを伝えられている。

「信じる」という事柄について改めて考えてみたいと思います。それは、差し出されたものを食べるかどうかという問題だと言うことができるでしょう。主イエスが差し出しておられるいのち、それは私たちが頑強な意志をもって拒むこともできるのです。これは、何らかの食卓において出されたものを拒否できることと同じです。食べるかどうかはあくまでも私たちの自由意志にかかっている。私たちの心が頑ななとき、差し出されたものがどんなに素晴らしいものであっても、受け取ることはできません。この心が柔らかくされなくてはならないのです。主イエスの前にいる群衆の心は頑なであり、主の御業を見ても信じることはありませんでした。

しかし、前にも言ったように、あなたがたは私を見ているのに、信じない。(6:36)

では、何が必要なのか。それは、聖霊の働きかけによって、主が差し出してくださっている「命のパン」を受け取れるように、柔らかな心にしていただくことです。「信じたくない」という心が造り変えられ、一度これまでに培ってきた価値観を脇に置いて、神が与えようとしておられる永遠のいのちを受け取ることなのです。

「主イエスを食べる」と聞くときに思い起こす営みがあるでしょう。そう、聖餐式です。私たちが心を合わせて食べるパンは、共に永遠のいのちを受けていることを証しする機会なのです。

本論3. 父の御心（御子を信じる者が一人も滅びないで世の終わりに復活すること）

主イエスの目的はヨハネ福音書を通して一貫しています。聖書の中で最も有名な聖句であるヨハネ 3:16 ではこのように言われています。

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。御子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。

この聖句と今日の箇所とを比べてみましょう。

私が天から降って来たのは、自分の意志を行うためではなく、私をお遣わしになった方の御心を行うためである。私をお遣わしになった方の御心とは、私に与えてくださった人を、私が一人も失うことなく、終わりの日に復活させることである。私の父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、私がその人を終わりの日に復活させることだからである。」(6:38-40)

ここでは、主イエスは父なる神様の意志を遂行するために来たと言われています。父なる神様が心底願っておられることがある。それは、罪人が滅びることではなく、ご自身との命の関係が結ばれることであり、それが永遠に続いていくことであると。そのいのちを与えることができるただ一人の方として、主イエスは世に派遣されました。主イエスを信じる人は、この地上の生涯ですべてが終わるのではなく、主の力によって復活させられ、新しく造り変えられた新天新地でいつまでも神と交わって生き続ける。そういう約束がここで語られているのです。

冒頭で申し上げましたように、私の愛する人々が先に世を去って行かれます。これは逃れられない事実であり、心に何度も空洞をもたらし、懐かしい思い出が更に苦しみを増し加えることもあります。最近、亡父修武の説教テープをデータ化し、YouTube にアップする作業を進めております。そこで聞こえてくる父の声、司会者の方の声、奏楽者のオルガンの音、これらは大切な記録であると同時に、私の胸をギュッと掴むものでもあります。地上ではもう会うことのできない現実が突きつけられる。しかし主イエスは、私たちがこの福音の御言葉に立ち、信じるならば、同じ信仰を持つ人々と再会できるという希望を語っています。私は生かされる限り、この福音を語り続けます。

【結論】

最後になりますが、40 節で「永遠の命を得る」と言われている「得る」という動詞は現在形であり、これは重要な示唆を与えてくれています。永遠の命を得ることは、実は未来のことではなく、今この時に起きることである。私たちが「命のパン」である主イエスを「今」食すなら（すなわち、信じるなら）、まさにこの瞬間に、永遠のいのちを持つようになるのです。聖餐式にあずかるとき、目には見えませんが、私たちは天国の饗宴と時を同じくしている。先に召された方々と同じ食卓でパンを食べているのです。どうか、この希望のメッセージを、すべての人が受け取ってくださいますように。

【祈り】

いのちそのものであられるイエス・キリストの父なる神様。私たちは、いつしか地上のことばかりを思い煩い、最も大事な永遠のことを忘れてしまいます。神と自分との関係はどうであるか、そこにこそ目を向けなくてはならないのです。この世では確かに煩わしい出来事が次々と追い迫ってまいります。しかし、主イエスはそのような現実にあっても、はるかに高い次元で生きる道を与えてくださいました。神との全き交わりの内を生きる道です。どうか、ここに集っておられる一人ひとりが、その道を掴み取り、その道を歩み抜くことができますように。そして、先に主の許に召された愛してやまない先達たちと、最高の喜びをもって再会する日を待ち望ませてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
荒野の如き世を生きる者たちに、ご自身との魂の交わりを求め給う、父なる神の愛、
天より降る「命のパン」そのものとして、属する者に永遠の安きを与え給いし、主イエス・キリストの恵み、
福音により、固い土壌を柔らかにし、御言葉を受け入れる心へと造り変え給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。